

	<p>2009年7月15日 第73号</p> <p>発行：いたばし水と緑の会 事務局</p> <p>年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会 http://homepage3.nifty.com/mizutomidorinokai/ E-mail : mizumidori@nifty.com 〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&fax3969-7124</p>
---	---

ツバメの巣調査

3月末頃から第一陣が到着、その後次第に数を増し雨上がりの後スーイ、スーイと気持ち良さそうに飛ぶツバメの姿を見て、季節の移ろいを感じる人は多いと思います。

また、国鉄時代に特急に「ツバメ」「はやぶさ」と名付けられていたのは、その速さを表わすものだったのでしょうが、新幹線の時代になり「ひかり」「こだま」となり時代の流れを感じます。



卵を温めているツバメ (3頁)

とはいえ冬の間温かい東南アジア方面で過ごし春になると数千キロの長旅をして子育ての為に日本に渡ってくるツバメ(のみならず全ての渡り鳥)の勇氣には本当に感動します。

そんな思いまでしてやってきた日本で無事に子育てができるかというとその保障はありません。日本でどのような日々を過ごしているのか、板橋区でツバメ調査のお手伝いをさせていただいた記録などをもとに書いてみたいと思います。

今年は中台三丁目付近、3か所のポイントを調査しました。

若木通りに面した建物の街路灯の上

2009.05.30

住所からこの辺りと思われる所を行きつ戻りつするが解らず。たまたま通りに出てきた年配の方に聞く。この辺は少し前まではツバメの姿をよくみましたが、最近ではね~と。その方がまた他の方に聞いて下さって漸くその場所が解る。車の往来の激しい通りに面した電灯の上にツバメの落とし物対策で段ボールが壁面にあるそこは何回も歩いた場所でしたが、言われるまで気がつかず。ツバメの姿、また巣を作っている様子は全く見られず、多分段ボールの様子から何からの関りがあるのでしょうか家主不在でそれ以上はわかりませんでした。

2009.06.11

段ボールが撤去されていました。たまたまシャッターが開いていて家主の方から話を聞く事ができました。

2,3年前までは毎年ツバメがきて雛をかえして帰って行くのが楽しみだったが、昨年カラスが巣をこわし、今年はツバメが様子を見にきたが遂に営巣しなかった。それでももしや・・・という気持ちで段ボールを設置して下さったようです。

マンション1階・駐車場入り口(写真下)

2009.05.30

この建物の近くに来た時、電線にツバメの姿があり場所が解り易かった。

たまたま住人の人から、昨日巣が壊されて下に落ちてました、とまだ壊された直後の跡がある。壊され方から多分カラスにやられたようです。

暫く観察しているとツバメは再度挑戦の様子もあるのか道向かいの学校の工事現場から泥を運んでいるようです。この場所は吹き抜けになっているのでカラスが入り易く、また常に人の往来がないのでカラスに一度目をつけられると、難しいかなと心配になる。なお調査用紙には過去にも巣を作っていたようで古巣の表記がありました。その場所は見当たらないので多分昨年と同じ場所に作っているのだらうと思う。

2009.06.11

壊れた巣がきれいに修復されていたが、肝心のツバメの姿が見えず。どうしたのだらう？

2009.06.29

その後どうなったかなと朝散歩の途中による。今回も電線上にツバメの姿が2羽、もしや・・・と期待をするが、残念な事にまた、巣が半分以上壊されていた。唯、下に落下物がないのでここ2、3日前という事ではないようだ。きっと去年営巣に成功したツバメが今度こそその思いで再建したようだが、努力が報われなかったようだ。場所の選択を学習するんだよ！と電線上のツバメに声をかえるが思いが届いただらうか。



カラスによって落とされたいしい巣(左)、とおなじところに再建したものの放棄され、ツバメのいない2度目の巣(右)

若木通り交差点角の一戸建て駐車場の内側（表紙の写真）2009.05.30

近くの電線にツバメの姿が数羽あり、通り側から段ボールの張り出しがチラッとみえた家があり特定できた。

個人宅の建物に内蔵された駐車場入口に巣があり、唯今抱卵中のようで嬉しくなる。奥の方にも段ボール紙で囲った場所があるが、どうやら使われていないようである。

2009.06.11

ツバメが抱卵中。卵を温めているツバメのみで、近くに他のツバメの姿が見えず連れは大丈夫かなと心配になる。

2009.06.29

その後無事だろうかとツバメのように一飛びにしたい気持ちで目的地へ。

電線上にツバメの姿がなく、もしや・・・と思って内側を覗かしてもらうと、ナント4羽の雛の姿が目に見え込んで嬉しくなる。ヒナの大きさにばらつきがあり一番大きいのが真中にその周辺に3羽が。嘴のまわりの様子から巣立つにはもう少し時間が必要のようである。

肝心の親鳥はと気にかかる。巣から離れ暫く様子を見てみると1羽のツバメが電線に止まる。まさか1匹で子育てをしているとは思いたくないが、そんなケースもあるのだろうか？

心なしか羽も傷んでいるようで気になる。後少しガンバレ！親鳥が子ツバメを連れて南の国へ帰れるように祈る。（近くでカラスの声があり気になるころ）

以上本当に簡単な観察記録です。

私が板橋区に住むようになり30年近くなりますが、越してきた当時はこの季節ツバメが列をなして上空を飛んでいました。志村三丁目駅への商店街、蓮根商店街と軒並みツバメの巣があったのを覚えています。その後年々減少し、今年は去年よりさらに少なくなっています。

都会で営巣するツバメにとって、建物の構造上の問題、巣の材料になる枯草や特に土を探すのが難しくなっている事もあります。それ以上にカラスの脅威が大きいと思います。

カラスも生きる権利もありますが、その賢さ故に、また周辺地域では生き物の頂点にいるので、いかにカラスから見つけられない場所に営巣するかがツバメにとっては成功の鍵をにぎる事になると思います。

とはいえ、消極的な解決策しかないのは残念です。ゴミ問題など、また捕獲作戦を続けるなどしてカラス以外の鳥にも住みやすい環境を人間が作ってあげられないかと。

ツバメの飛来を心待ちしている方も見受けられ、巣の下に段ボールなど設置したりフン対策と巣立ち日ヒナが落下しないような配慮をして下さる姿に、嬉しくなります。

その他ツバメの減少の一因には、ツバメの越冬地・インドシナ半島、マレー半島、オーストラリアなどの地域の自然環境の問題もあると思います。それと同時に長旅の途中の気象条件の変化なども地球温暖化の影響を受けているのではないかと危惧します。

そのような悪条件のなか命がけで渡ってくるツバメが日本で無事に子育てを終えられるように心からエールを送りたいです。

ツバメを大切に思う人達の言い伝えとして

- ・ ツバメが巣を作ればその家は金持ちになる。
- ・ 明るく幸福な家にはツバメがくる。
- ・ ツバメの卵に触れると手が腐る。
- ・ ツバメを殺すと火事になる。

と昔からツバメを大切に思う気持ちがありました。

また、昔は空中低く飛べば雨降りが近く、高く飛べば晴天が続くと空飛ぶツバメを天気予報のバロメーターにしていたようです。

巖流島の決闘の一場面、2刀流の宮本武蔵に対する佐々木小次郎はツバメ返して応戦・ツバメがヒラリヒラリと自由自在に方向を変える姿を想像しながら終わりとします(棚木能武子)

常緑樹は葉を何年付けているか

樹木は落葉樹と常緑樹に大別され、落葉樹は毎年秋から冬にかけて落葉し、常緑樹は新しい葉が出た後に古い葉を落とすと言われている。この表現からは、常緑樹は前年の葉を落すようにも受け取れるが、果たして何年前の葉を落すのか定かではない。実生からの植木を育てていて、常緑樹が前年の葉を落さないことに気付き、ふと何年くらい葉を付け付けているのかと思い、散歩がてらに身近な赤塚公園などの常緑樹(針葉樹を除く)について眺め、その結果をまとめてみた。

計画的な長期間に亘る調査ではないこと、断片的・思い付きでの観察の上、知識に乏しい筆者が独断的に書いた恐れがあるので、軽く読み捨てていただきたい。

赤塚公園の崖線下の平坦部には大きなクスノキが何本もあるが、春先に新芽が出始めると同時に落葉が始まり、若芽の成長とともに盛んになり、根方は落ち葉で敷き詰められる。その後もぼつぼつ落ち葉は続き、昨年の葉は殆どなくなり、樹によっては僅かに残っているが、ほぼ全て毎年葉を付け替えているようだ。しかし、周りに生えている幼木では、多くの樹が4世代の葉を付けているのが見受けられる。処々にまとめて植えてあるマテバシイは、クスノキより少し遅れて落葉が見られるが、実をつけた樹でも4世代の葉をつけているのを見かける一方、垂れ下った枝で日も当たらないものでは、前年の葉がないものや今年の葉をつけたまま枝が枯れたりしている。これは樹木全般に共通の生長に伴う生理的な下枝の振り落し現象であろう。シラカシが葉を落すのは6月末頃に多く、ネズミモチは7月に入って花がらと一緒に落すのが見られる。

これまでに10種類ほどの木を見たかぎりでは、前年の葉を春に落してしまう木は、前記のクスノキの古木以外にはあまり無いようである。多くの樹が2年以上同じ葉を付け、若くて元気な枝では5年も付けている樹を複数見かけた。これは若い元気な木では枝も少なく、枝は垂れ下がらないので自分自身の葉で日陰になることが少なく、多くの葉で盛んに同化作用を行い、旺盛に成長しているからではなかろうか。大木になると樹冠がこんもりと天蓋を作り、古い葉に光が届きにくくなり、あまり生長に寄与しないばかりか、水分の蒸散などで負担になるので、古い葉を早く落すのではなかろうか。

樹齢だけでなく生えている場所や、枝の付き具合などの条件でも、落葉の時期は変わる事は前に記したマバテバシイの枯れ枝の例からも、日陰や乾燥したところでは早く落葉するであろうことは伺える。また、これまでの趣味の園芸で、鉢を永く屋内などに置いて光線不足にしたり、鉢を乾燥気味にした時には、下葉から振り落として行く現象を見ていることから、樹勢が弱いと古い葉を早く落すことは容易に推定できる。



写真1 3代の葉が付いているマテバシイ

新しい葉が育ってから古い葉を落す事を譲り葉(現象)と呼んでいる。人の世で育った子に親が跡目を譲る

ことで未永く家業(子孫)の繁栄が叶う事になぞらえた縁起のよい事象と考えたようだ。常緑樹にユズリハ(トウダイグサ科)という名の木があり、縁起の良い木として庭に植たり、枝を正月飾りにする習わしもあると聞く。

常緑樹はほとんど全て譲り葉の性質を持つのだが、数多くの常緑樹の中からこの樹種にユズリハの名を付したのか、浅学にして知らないが、この木も前年の葉を落さず付けているみたいだ。しかし、ある家の庭木は今年の葉が殆ど無いか、あっても元気の無い葉ばかりで、2年間は持ちこたえ切れそうも無い木があった(今回観たユズリハ6本中の1本)ので、こんな木からの命名なのかも知れない。



写真2 4代の葉が付いているシロダモ

余談だが、落葉樹は全ての樹種が秋に葉を落すとは限らない。ブナ科のブナ(次頁 写真3)・カシワ・クヌギなどや、マンサク科のシナマンサク(次頁写真4)は春まで枯葉を付けていて(若木ほど多い)、冬芽を寒さから護っているようだ。カシワは譲り葉で縁起がよいところから、柏餅を5月の節句に作って男児の成長を願い、また祝う風習が生まれたとも聞いている。シナマンサクは早春に枯れた葉の中に花を開く。また、ササやタケ類も常緑で、新しい葉が出たあとで古い葉(これも今年の葉とは限らぬようだ)を一斉に落すので、俳句では「竹の秋」とか「竹秋」として春の季語になっているようだ。

常緑樹でも中には落葉時に紅(黄)葉する木もあるが余り目立たないが、クスノキなどでは赤みを帯びた葉を見かける。葉の表面を覆う革質層が目立たなくしている一因かもしれない。葉が赤くなるのは、葉に含まれるアントシアニンによるものだが、この成分は若葉の時から存在し、

いろいろな木が新葉を赤くして、若い葉が日焼けするのを防いでいるのだそうだ。このアントシアニンの多寡によるのか、クスノキなどの若葉の色が木ごと枝ごと微妙に異なり、パッチワークを眺めるようで目を楽しませてくれる。7月のいま、成木の葉は万緑に変わり、光合成作用により幹や枝を太くしたり、実や種を育て来年の葉や花の芽を準備するとともに、貴重な酸素のフル生産に入ったのではなかろうか。(猪鼻昭二)



写真3 4月初旬に枯れ葉をつけているブナ



写真4 枯れ葉に埋もれて咲くシナマンサク

ミニトンボ池 ヤゴが復活・ザリガニ対策成功間近のハブニング

4月18日にミニトンボ池(浄蓮寺下ピオトープ)の生物調査しました。明らかにザリガニが減少し、ヤゴ多数(オオシオカラトンボヤゴ46, クロスジギンヤンマヤゴ2)を確認しました。ヒキガエルの卵も5塊ありました。

どこのピオトープ池でもザリガニやミシシッピーアカミミガメなどが放されて苦労しています。このミニトンボ池も2002年にザリガニを発見して以来ザリガニしかいない池となり、いろいろやってみましたが根絶できませんでした。ナマズがザリガニを食べてくれる・・という真田さんの案に望みをかけ、ザリガニ対策をナマズに託して約1年半、上記のように信じられない大量のヤゴの記録となりました。

ところが、5月16日猪鼻さんからこの池が干上がっているという情報があり、みんなで空っぽの池を見て仰天しました。池の傍らに、「排水設備機能回復のため、池の清掃および排水柵の補修を行います」という立て札ひとつ。ザリガニトラップ引き上げられ、カエルの卵もザリガニも、大事なナマズもトンボのヤゴもなし。

ナマズがザリガニを減らすのに有効と思われますが、実験が中断されてしまったので、言えることはザリガニが減り、ヤゴが復活したことだけです。



水が抜かれて空っぽになった池

雨が降り、湧水が流入し、池はリセットされ、元の形に戻りました。ヤゴはいませんが、トンボが産卵に来ています。もちろん、排水機能回復のため、池を干し上げる必要は全くありませんでした。

(坂本 郁子)

写真右 水がたまり元に戻った池



観察・活動の記録(2009年5月～7月)

5月16日(土) 赤塚トンボ池調査

ザリガニ、スジエビ、ヨコエビ。コイ(大)8匹捕獲。金網ができる前に40cm程のコイ5匹確認しているので、柵ができる前に投げ入れられたものと思われる。山田さんと瀬田さんが奮闘して網で捕獲(写真右)。高いフェンスが出来たので今後は大きなコイの投げ入れはないと思いたい。浄蓮寺下池(ミニトンボ池)干上がる。



5月23日(土) 湧水水路

調査と水路の掃除(泥浚え)草刈り。美術館側に漏水あり(2カ所)。ザリガニ大27匹、中80捕獲

6月6日(土) 成増4丁目緑地

斜面上から下まで(南北)幅10mの方形区の植生調査(2)

6月20日(土) バッタ広場

3月28日から約3ヶ月のブランク後の作業。樹木・ササ・クズなどを排除して明るくなった地面に植物が一斉に伸びて壮観。出てきたササ、オオブタクサ、セイタカアワダチソウ、ヌルデの実生、エノキの実生をせっせと抜いたり刈ったり。オギ増える。ネジバナの花咲く。トンボ池水温21。COD7。

6月27日(土) バッタ広場

引き続き帰化植物(セイタカアワダチソウ、ブタクサ)の抜き取り、エノキ等の実生・ササ刈、広場縁のエノキ刈り込み。ナガゴマフカミキリ、オオシオカラトンボ産卵(ミニトンボ池)、ギンヤンマ産卵(トンボ池)、コシアキトンボ

7月4日(土) 成増4丁目緑地

斜面上から下まで(南北)幅10mの方形区の植生調査(3)

7月12日(土) バッタ広場

植生調査。南北34mに糸を張り糸上の植物を記録(現状の植生を把握)。

クズの徹底的な抜き取りによりクズは少なく、あっても虫に食われてボロボロで元気がない。裸地化して今度はオオアレチノギク(ヒメムカシヨモギ)がかなり繁茂しそうな気配。オオマトヨイグサも増えている。外来種は選択的に除去しているにもかかわらず一向に減らない。ハ

エドクソウ、チヂミザサ、チトメグサ増える。バッタ類の幼虫多数。ジウジンガカメムシ、ゾウムシ。トンボ池の水面にプランクトンの膜が出ている。

活動のお知らせ

運営委員会は原則として第4土曜日の作業・観察会の後に赤塚ため池公園そばのラーメン「しらかば」で行い、報告や活動内容などを相談します。どなたでもお気軽にご参加ください。

午前中の作業の状況で時間が多少ずれることがあります。雨天で作業が中止の場合も運営委員会は開きます。からないときは、坂本(090-4618-1295)に御連絡下さい。

8月運営委員会： 8月22日(土) 12:30~13:30

9月運営委員会 9月26日(土) 12:30~13:30

会報の印刷・発送は奇数月。お手伝いできる方はよろしく

日時：9月16日(水) 18:30~

変更する場合もあるので、事務局にお問い合わせ下さい。

活動の問い合わせは事務局瀬田まで(3969-7124)

会では赤塚城址周辺で、私たちが作ったピオトープを中心に自然の変化を観察したり、ゴミ拾いや、ピオトープの環境整備を行っています。観察会は原則として雨天も実施します。

7月25日(土) 10:00~12:00

バッタ広場ササ刈等と生き物観察

集合場所：赤塚トンボ池(板橋美術館そば) 暑いので飲み水忘れずに。

8月22日(土) 10:00~12:00

バッタ広場ササ刈等と生き物観察

集合場所：赤塚トンボ池(板橋美術館そば) 暑いので飲み水忘れずに。

光が丘公園すすき原っば見学

9月19日(土) 10:00 光が丘公園バードサンクチュアリ前集合または

9:30 東上線成増駅集合

成増4丁目緑地調査(の植生調査)

8月1日(土)および9月5日(土) 10:00~12:00

東上線成増駅集合

あなたも会員になってください(年会費2000円：振込先は表紙に記載)

いたばし水と緑の会の活動はすべて会員の会費によってまかなわれています。主な使途は、会報郵送料、印刷費、ピオトープ池維持管理のための資材費、コピー代などです。